

命を本気で守る

私は、消防団に勤めている父の姿にあこがれて、消防士という職を選んだ。この職に就いて、これまで命を助けることができ、うれしいこともあった。しかし、それ以上に、命を助けることができず、辛い思いをすることの方がたくさんあった。ある火災の現場では、消火活動を終えたあと、建物の中に入ると、小学生が3人重なり合って亡くなっている姿を見た。この姿を見たときは、本当に苦しくなるほど辛かった。水害があった時は、人が土砂に埋もれていると報告を受け、直ちに現場に向かい、力の限り必死に土砂を掘り続けたが、助けることができなかった。どちらの現場でも、どうして助けられなかったのかと自分を許すことができなかった。

私は、これまで様々な生と死を分ける命の現場に立ち会ってきた。交通事故で亡くなられたり、災害から逃げ遅れたり、時には自分で自分の命を絶つたり……どの現場も、多くの悲しみにあふれている。家族の方は号泣し、気が狂ったように泣き叫んでいる。呆然と立ち尽くし、無言のままいつまでもその場所を離れようとしなない人もいる。そんな悲しみにあふれる現場は見たくない。そういう現場をなくしたい。どうすればもっと命を守れるのだろうか。必死に問いかける自分がいる。

まず、自分の命を自分で守るということがどれほど大切か考えてもらいたい。そして、自分が助かることができたならば、家族や地域の方を守ってもらいたい。そのためには知識や備えが絶対に必要である。それが中学生に防災教育を行うきっかけとなった。